



レムリア、時  
を越えて



千秋

夜空に星が輝いていた。星はガラスの花のような形をしている。すーっと斜めに流れては、縦に落ちて、まるで花火のようであった。私たちは星から未来に起こる出来事を読み解く。星は宇宙からの信号なのだ。

翌日の長老会議での事だった。この国は、4つの大陸からなっている。それぞれの大陸に、それぞれの長老。彼らが、このレムリア全体の方向性を統括して決める。しばしば国同士で意見が違う事は、勿論あった。そのような時は、女神たちの神殿に行き、占いをする。トキと呼ばれる鳥を使うのだ。彼らに、女神との意思疎通の仲介役をしてもらう。特に、この占いは大地の女神の神殿で行われた。それぞれ4つの国の意見を紙に書き、トキ1羽の足に、まとめて結びつける。そして、トキを神殿の中に放つ。するとトキが1枚の紙と、何か1つ、我々の手助けになるものを携えて、やってくる。この紙に、女神の意見が書かれているのである。

この日、我々は、ある意見で一致した。それは来るべきアセンションの時代、人々の意識が大きく変わる、その時代に向けて行動をするべきだという意見だ。しかしながら、どのような方法で我々の意志を伝えるべきか、という点において、意見は二分した。意志は「石」であり「医師」であった。我々は言霊を重要視している。なぜなら、同じ音を持つものは、似たような波動を持ち、共鳴しあうからである。

アセンションに向けて我々が意志を残す為に出た案は石を使うか、医師を使うか、であった。石を使う、というものは、我々が日常的に使っている手段としても知られているものであるが、石の中に言霊をいれ、手紙のような機能を持たせる事であり、医師を使うという手段は、後の世に、レムリア時代の優れた医師をテレポートさせて西暦二千年頃までに完全復活、要するに、その時代の波動や重力の重さに合わせられるようにする事で技術力を発揮させるのである。

今回は、どちらの案にするかを決めるために占いを行った。結果はクリスタルとなり、トキの足にはレムリアンシードと呼ばれる新種のクリスタルが結びつけられていた。

地球のアセンションは何度か行われ、失敗を繰り返してきました。そして大きな変動は2015年あたりに、何も滞る事がなければ、宇宙全体の生命、総力を尽くしてイベントを起こす事になったのです。それは地震や津波になるかもしれません。あるいは、まだ言葉としても表現しきれない現象でしょう。国全体が逆さまになるのです。

私たちは愛を送る事にしました。それが最後のクリスタルセレモニーです。レムリアンシードは特別なクリスタルでした。時期がきた時に、それぞれの想いを、意志を来世の自分自身に伝えねばならないのです。それまでに、ライトワーカーたちは苦行に直面した事でしょう。闇を光に変える、闇から光に帰る大仕事を担っているからです。我々は月、太陽に祈りを込めながら、クリスタルのバーコードを刻みました。

レムリアには文明もあり、文字もあります。それは横線で表現されていました。くさび形文字やハングルには、当時の表現が色濃く残されています。これは後々に分かる事ですが、線の長さや間の具合に共通点があるのです。

アセンションでは多くの人が上昇とともに、それぞれの担当場所に、うつる事になっています。これはレムリアの民が宇宙連合とともに決めた事です。新たな挑戦であり、我々が創造主の仕事の一端を担うものです。

## レムリア出身に関して

---

アセンションを先導する魂の中には色々な星の出身者がいて、それぞれに役割を持っています。2015年、この年は海に関する年であり、波に関する災害も多くなるでしょう。私たちは、あらゆる星々からのサポートや予言を受けながら準備を進めました。レムリアが崩壊する前に、私たちはレムリアの叡智を後世のために残すこと、直系の子孫をプレアデスといった星々に避難、またはシャンバラに移り住むための準備を整えると、残りの時間を楽しむため、祭りや魔術を行ったのです。

朝の薄焼け、不死山の頂きから後光が射した。私は歩く。身体中に歪みが出ていた。地場が急激に変わっているのだから、この姿を保つことが難しいのだ。私は、まるで幽霊だった。レムリアの人は、もともと半透明の人が多いのだが、私が、ここまで歪んでいるとは。腰まで届く長い黒髪、首もとまで届く濃いヒゲは風に揺らいた。しばらく歩くとクリスタルでできた蔦が見えてきた。風向きが変わる。私の背中を蔦の方に向けて、押し出したのだ。導かれるままに蔦に近づくと、穴を発見した。その穴はクリスタルの蔦に隠されるように空いている。私は頭をかがめ、穴の中に入った。蔦の間から光が漏れ、まるでステンドグラスが貼られているように、頭上はキラキラしていた。クリスタルの蔦の中に虹が映る。どこからか歌声が聞こえてきた。私は金の装飾で縁取られた赤い靴を、前へ前へと動かしながら、歌声を聞いた。土の感触は感じられない。私の足は透明に透けていた。

蔦のトンネルから出ると、そこには大きなクリスタルのドームがあった。目の前には花や緑の蔦で身を飾った女神がいる。澄んだ音が、足を踏み出すたびに、ドームの中に響き渡った。女神は私を見ている。クリスタルの瞳は、私の、しっかりとした身体の稜線を映し出していた。私は、このドームの中では姿を保っていられた。おそらく地場が整っているのだろう。

女神は桜の花弁のような唇を開いて言った。

「クリスタルを、お取りください。」

私は女神の足元の祭壇に目をやった。小さな木のテーブルのようなものに赤いクッションが乗せられている。クッションの上にはクリスタルが沢山置かれていた。青いクリスタル、黄色いクリスタル、透明なクリスタル、形も、様々だ。私は赤いクリスタルの原石と、透明なクリスタルのポイントを手にとった。

「ありがたく、いただきます。ガイア。」

女神ガイアは微笑んだ。その瞬間、彼女の周囲にピンク色の霞が現れた。

「それでは、未来のあなたに伝えたいことを、クリスタルの中にインプットしてね。リリー、あなたは火の神殿を、お守りするのですでしたね。忘れずに、クリスタルの中に残しておくのですよ。」

私は女神に、はい、と返事をし、透明なクリスタルの表面を指で、なぞった。赤いマニキュアを塗った爪の先がキラキラと光を反射する。

「まずは一つ目のクリスタルに。自分がレムリアの記憶を思い出す時に、これを手にとるように意図します。何故、自分が地球に生まれたのか。そして自分の中の秘められた力を開放するために、エネルギーを注ぎます。」

私の手と、額の目が熱くなった。灼熱の炎が、体から燃え上がる。このクリスタルは今の私に代わって、未来世の私に夢を与える。

「そして二つ目のクリスタルに。この赤いクリスタルには私の血を注ぎます。物質世界での具現化を助けるために。そして、アセンション後の使命を思い出すために。私は、このシェイプシフトの能力を後の世に伝えます。」

赤いクリスタルにヒビが入った。この炎に耐えきれないのでは、と私は思った。それほど、レムリアのエネルギーは地球に大きな影響を与えるのだ。クリスタルは後の世の地球のエネルギーに合わせて作られているのだから。

「さあ、それが済んだら、次のステージに行きなさい。地球のコアに向かって。ここから降りるのです。」

女神の後ろには地下に通じる穴が掘られていた。地球とは、また違う、澄んだ空気が流れている。私は吸い込まれるようであり、押し上げられるような風を穴から感じていた。

「そこに飛び込めば、みんなのところに行けるでしょう。さあ、思い切って飛び込んでみて。何も恐れる事は、ありません。全ては、ちゃんと用意されていますよ。地球のコアは大宇宙に繋がっています。宇宙が拡大を続けるように、地下の世界も拡大を続けているのです。」

私は風の中に飛び込んだ。恐れてはいない。風は暖かく、私を包み込んだ。見えない手に抱き込まれるように、私は下降を続ける。目を閉じた。まるで母親の体内にいるようで、とても心地が良い。風が変わった。頬に湿った雨の日の風を感じる。

目を開けると、そこには人の波、波、波。茶色のレンガで出来た室内には大きな窓があった。ガラス張りになっており、そこから地球が浮いているのが見える。ラピスラズリのような深い青の中に浮かぶ地球。雲は、緩やかに流れ、緑の陸地を見え隠れさせる。どこまでも続く宇宙。星のきらめきはダイヤモンドのごとく、地球を覆う。

「さあ、準備の出来た者からクリスタルを地球に離すのだ。」

「ああ、あなたは何のメッセージを残しましたの？私はプレアデス、人類の精神的な成長をサポートするためのメッセージを残しましたよ。」

「地球は美しい。ただ霊的成長のために大きな試練を与えられるのだらうな。私は今からワクワクしているよ。奇跡的な道しるべを指し示す事が出来るのだから。」

「これからレムリアが沈むのね。信じられないわ。今、しっかりと記憶しておかないとね。みんなと、きっと来世で出会えるはず。」

「そうね、セシリア。私は日本に生まれるわ。もう、ご指示が出ていたの。さあ、忙しくなるわよ。あなたは、どこ？」

この部屋では色々な会話が繰り広げられていた。これから大掛かりなイベントがある

のだ。（勿論、それはアセンションだ）

私はクリスタルを窓から離す作業を見ながら、自分の番が来るのを待っていた。クリスタルが地球に降り注ぐ。遠目から見ると、それは雹が降っているようだった。星の中に飲み込まれ、地球の海や山に、きっと大きな音をたてて落ちているのだろう。

目の前の女性がクリスタルを離し終わり、やっと私の出番がきた。私は精一杯の愛を込めて、クリスタルを離す。赤い閃光と白い光が地球に向かって瞬いた。クリスタルは、あるべき場所に向い、やがて来世の私の手に渡るだろう。

「リリー、離れたの？」

赤毛でオフホワイトの肌の女性が私に話しかけてきた。セルジアだ。彼女は私の長年の友人である。幼い頃から神殿で一緒に瞑想や魔術、ヒーリングを学んだものだ。

帰り道、私は彼女と懐かしい広場を歩いた。細長い葉は露を含み、囁きあっている。実際に、植物同士で話をしているのだ。

さあ、これから火の神殿に戻る。プレアデス星団と通信をし、移動の準備をしなければ。セルジアは火の神殿で大きな篝火を起こし、私を待っていてくれることだろう。

これから人類は覚醒の道をたどる。それは避けられない事だ。私たちが死を受け入れ続けるように。一秒一秒が奇跡の連続なのである。そして全ては、起こっているのみ。時に私たちは忘れてしまう。そして私たちは、また忘れる事を望むだろう。その日までは。